



東北大

# きょうかん

発行  
東北大学教育学部  
関東地区同窓会

事務局  
〒192-0904  
東京都八王子市  
子安町 1-30-22-417  
(長沼 真吾方)

電話 042-656-3484  
naga-naka-se@aa.cyberhome.ne.jp

題字：江川 亮

「きょうかん」による情報提供、主な活動は、毎年発行の会報

次に、関東地区同窓会の現況をご報告いたします。登録会員数は三九一名ですが、宛先不明者や逝去者を引いた実質人員は三四三名で漸減傾向にあります。

世界的な「新型コロナウイルス」の感染拡大に加えて欧米中心に「サル痘」の出現、更には地球規模での異常気象による災害の多発、ロシアによるウクライナ侵略、安倍元首相の暗殺事件等々、国内外で深刻で気がかりな情勢・事件が続くこの頃です。会員の皆様におかれましてはご健勝で過ごしのことと存じます。平素は「きょうかん」活動にご支援ご協力をいただき心からお礼申し上げます。

一昨年秋開催予定だった第十六回総会・懇親会は、コロナ感染拡大防止の観点から中止とさせていただきます、代わりに書面表決で議案を議決・承認いただきました。

(詳細は昨秋の臨時増刊号で報告済み)

さて、今年の総会・懇親会は下記ご案内の日程にて開催を予定し準備を進めております。皆様とは四年ぶりの対面・再会となりますので、お忙しいとは存じますが一人でも多くの会員の方が参加されますよう心からお待ちいたしております。

二年毎開催の総会・懇親会による連帯感の醸成、東北支部や関東萩友会(全学同窓会)との連携活動等であります。着実に歩を進めている関東地区同窓会ですが、近年、会員の高齢化に伴う減少、若手会員の発掘拡大の苦戦等の課題に直面しています。

会員の拡大については、役員が率先垂範で努力することは勿論、同窓会本部・東北支部との連携も一層強化してまいります。会員の皆様におかれましてもお力添えをいただきますようお願いいたします。

母校東北大学は、一九〇七年の創立で今年百十五周年・総合大学百周年を迎えます。我が教育学部は、令和三年発行の臨時増刊号の「教育学部の歴史」で紹介したように、一九二三年に前身となる教育学講座が法文学部に設置されたことに始まります。一九四九年



星 永揚 (教育学部 66年卒) 東北大学教育学部関東地区同窓会会長



「川内キャンパスの教育学部棟」春の青葉の風景



「川内キャンパスの三太郎の小径」阿部次郎の代表作「三太郎の日記」から命名

※「ドローンで母校の各キャンパスを巡ってみましょう！」パソコンの検索で「ドローンで見る東北大学」と入力し、検索してください。

公布の「国立学校設置法」により、旧制宮城師範学校(青年師範学校を含む)を包摂して新制東北大学の一学部として発足しました。その後一九六五年教員養成課程の宮教大への分離、一九九八年大講座化への改革を経て現在に至ります。卒業生も各方面で活躍されており、心強い限りです。研究第一主義・門戸開放・実学尊重の建学理念に基づき母校がこれからも一層発展していくことを心から願っております。

皆様もぜひ一度、懐かしい仙台に足を運び母校を訪れてみてください。元気が出る事を請合います。

## ◆第17回東北大学教育学部関東地区同窓会総会・懇親会のご案内

前回実施予定だった第16回関東地区同窓会総会・懇親会は、コロナウイルス感染防止の観点から残念ながら中止とさせていただきます。今年は4年ぶりに下記日程にて開催いたします。懐かしい青春時代を共に「杜の都・仙台」で過ごされた同窓生の皆様が一堂に会し、旧交を温め、交流の輪を広げる絶好の機会です。ご多用とは存じますが、一人でも多くの会員の方々がご出席いただきますようご案内申し上げます。

なお、出欠のご返事は、遅くとも10月20日(木)まで、同封の葉書で事務局あてお寄せ下さい。

東北大学教育学部関東地区同窓会会長 星 永揚

記

●開催日 2022年(令和4年)11月6日(日) 13時より

●会場 麗澤大学東京研究センター (詳細は2ページをご覧ください)





本年4月より、研究科長・学部長に就任いたしました野口でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

私自身、一九八〇年(昭和55年)入学した教育学部の卒業生でございます。もともとは関東の出身ですので、地元に戻っていれば今頃は関東地区同窓会のお世話になっていたことと思いますが、学部卒業後は大学院教育学研究科の前期課程及び後期課程、そして助手と、計14年間にわたり川内で過ごしてまいりました。その後も、川内から少し山を登ったところにある宮城教育大学に20年と半年ほどおりまして、二〇一四年の十月より再び教育学研究科でお世話になっておりますので、残念ながら関東地区同窓会の皆様とはお目にかかる機会がございませんでした。総会・懇親会におきまして、皆様にお目にかかることを楽しみにしております。

さて、本学のHP等を通じて既にご存じのことと思いますが、本年は東北大学創立百十五周年、総合大学百周年の年に当たります。一九二二年に法文学部が設置され、総合大学としての枠組みが整ってから百年ということになります。教育学部が設置されたのは

一九四九年ですので、教育学部はこの百周年とは直接関わりがないように思えますが、法文学部の授業が実際に開始されたのは一九二三年で、この年に法文学部内に教育学講座が設置されております。つまり、教育学部のルーツは法文学部の設置にあると考えてよいだろうと思います。

そのようなこともあり、教育学部・教育学研究科としては、この百周年という記念すべき年を、卒業生・修了生の皆さんとの繋がりをいっそう深めていく契機としていと考えています。そのような取り組みの一つとして、本年の一月に「教育学部・教育学研究科 みのりの教育研究支援基金」を創設いたしました。ぜひ本学のHPをご覧いただければと存じます。また、本年十月一日に開催される東北大学ホームカミングデイに合わせて、「教育学部交流会」を開催することといたしました。これは卒業生の皆様と在学生が集い、年代を超えて交流していただく機会とするともに、在学生にとって自らのキャリアパスを考える機会とすることを意図しています。このような会を設けるのは教育学部・教育学研究科として初めてのこととなりますが、次年度以降も

継続していければと考えております。

教育学部・教育学研究科の近年の動向としては、二〇一八年に教育情報学研究所・教育部との統合・再編を行い、教育学や教育心理学をベースとしながら、近年、社会の要請が高まっているAIやデータサイエンス、ロボティクスについて学ぶことのできる文理融合的な教育研究体制をいち早く整えました。また、その際、大学院にグローバル共生教育論コースを新たに設置し、この四月には博士後期課程に国際学位コース(英語のみで学位の取得を可とする教育プログラム)を設けるなど、グローバルな教育研究体制の構築にも力を注いでいます。二〇二〇年三月末にUNESCOバンコク事務所と包括的学術交流協定を締結し、国際ウエビナー等において協力いただいてまいりましたが、今年度、同事務所における学生のインターンシップを初めて実現することができました。

今後も様々な取り組みを進めてまいりたいと思っておりますので、ご協力・ご支援のほどどうぞよろしく



緑に囲まれた懐かしい「川内荻ホール」

## 第17回東北大学教育学部関東地区同窓会総会・懇親会

- ①日 時 2022年(令和4年)11月6日(日)13時より(12時30分受付開始)～17時
- ②会 場 麗澤大学東京研究センター
- ③総 会 13時から
- ④講 演 13時30分 ★講師 野口 和人氏(東北大学教育学研究科、教育学部長)  
★演題 「東北大学創立百十五周年・総合大学百周年」
- ⑤懇 親 会 14時30分 「三国一」:(麗澤大学東京研究センター同ビル地階)
- ⑥会 費 5,000円(当日受付にてお支払いください)
- ⑦申 込 10月20日(木)までに、同封の返信用葉書で出欠をお知らせください。
- ⑧問 合 せ 同窓会事務局 長沼 眞吾 TEL・FAX 042-656-3484

### インフォメーション

#### ☆講師:野口 和人(のぐち かずひと)氏のプロフィール

1961年(昭和36年)7月9日、埼玉県さいたま市生まれ。1980年(昭和55年)東北大学教育学部入学、1984年(昭和59年)3月東北大学教育学部卒業。同年4月教育学部研究生、1985年(昭和60年)4月教育学研究科博士課程前期入学、1987年(昭和62年)4月博士課程後期3年の課程に進学、1991年(平成3年)3月博士課程後期3年課程の単位取得。同年4月東北大学教育学部助手、1994年(平成6年)4月宮城教育大学教育学部助教授、2007年(平成19年)4月宮城教育大学教育学部教授。2014年(平成26年)10月東北大学大学院教育学研究科教授。2022年(平成4年)4月同大学教育学研究科研究科長(教育学部長兼任)に就任、現在に至る。

#### ☆会場:麗澤大学東京研究センター

麗澤大学東京研究センターは、新宿副都心の新宿アイランドタワー4階にあります。

所在地:東京都新宿区西新宿6-5-1 新宿アイランドタワー4階にあります。

電話:03-5323-6196

アクセス:JR 新宿駅西口より徒歩8分 東京メトロ丸の内線西新宿駅下車すぐ上  
地図は麗澤大学のHP <http://www.reitaku-u.ac.jp/> 交通案内にあります。

お願いいたします。

### 東北支部の仲間から



「喜寿の想い」  
東北大学教育学部同窓会東北支部長  
鹿野 毅 (学校教育 68年卒)

ようやく収まったかみえたのも束の間、コロナ第七波は、今以上に猛威を振るっている。しかし、それを物ともせず、東北の各種夏祭りが、工夫された感染対策の下、華々しく開催され、東北人の血を沸き立たせてくれた。

関東支部の方々におかれましては、ますますご健勝で、支部活動に精励なされておりますことに、敬意を表します。

東北支部は、ここ二年、コロナ禍により、各種事業を中止、又は書面で行わざるを得ませんでした。そこで、今年こそは、総会その他計画した事業を、成功裏に遂行できよう努めているところです。

しかし、二年間のブランクは、高齢である会員の意識を低下させ動きも鈍くさせています。他にも前号で紹介したように、支部には課題が山積しています。

そこで、支部の今後の在り方について、「検討委員会」を設置し、方向性を探り始めたところです。

・従前の拡充方策を、会費の納入を基にスリム化に転換する  
・教育学部の諸事情から、同窓会活動を活発化していきたい  
ということだが、兼ね合いは、

等々、具体的にはこれからですが、検討されたことを基に、支部の将来像を描き、その具体化への手立を講じていく所存です。

五月、全国の釣友と、長崎県男  
女群島に釣行した。全国大会でなければ渡航はしないという程の強風雨・うねりの中、磯に二泊し、今まで経験したことのない釣りを堪能した。帰った翌日、野良仕事に精を出した。

七月、能登の総持寺祖院に参拝した。帰途、ワイバーを高速にしても視界がきかない程の大雨に見舞われ、想定外の車中泊を経験した。日程を短縮し、三日の旅になったが、約千三百km超を一人で運転した。だが疲労感はなかった。

この二つのことで、自分の体力に自信めいたものを感じた(危険と裏腹とも)。なにか明るいものを感じた。

今までは、気弱なくせに短気、それが因で、いつも他に迷惑をかけては悔み、くよくよし、劣等感に苛まれる生き様であった。他には自己肯定、自己有用感の必要性を説いても、自分の中では実感できずにきた。

しかし、この度の経験で、たとえ体力ではあっても、自信を持つということは、生きることの意欲が沸き、希望を持って、前向きに生きられることを、喜寿にして、初めて実感できた。今日が一番若い。明日できないことに挑戦を。

今の想いを大切にして、支部活動に取り組んでいきたい。



「若人に期待する」  
中川 典雄 (教育社会 66年卒)

暑い夏が到来し甲子園球場の若さ溢れる全国高校野球選手権が始まった。今年の球児は三年間コロナ感染の高校生活です。感染が拡大し思う存分力を発揮できないチームもありました。この夏の感染力の拡大は大きく、しかも若年層に拡大、死に至ることもあり、後遺症に苦しむ姿を見ると胸が痛くなります。国内の感染対策も二転三転し、この夏は行動制限のない社会生活となりました。私たちが

ができる予防策はマスクの着用、換気をする、ワクチン接種をうける、手洗い、三密をさけるといった基本的な感染対策です。誰もがこの基本的な対策を実行しコロナと共に生きる「ウイズコロナ」を

追求しながら当たり前の生活を過ごしたいと思います。感染者が増え救急搬送困難を生じ重症者を救えない、またコロナ以外の疾病患者を治療出来ないことを仄聞します。経済と両立した予防政策の内容を良く点検し、安全安心を基本にした医療体制の実現を強く望みます。ところで平成一七年話題に上った宮城県立高校の男女共学化の動向です。男子高卒の私は当時「無理に共学化すべきでない」共学化反対でした。今年で共学化政

策は完了し、県立高校は全て男女共学化となりました。評価は別として元男子校への女子生徒の進出が多くなっています。私の母校でも生徒会長や応援団長に女子が就任し活躍しています。七月、地元紙に「教員、政治活動だ、剥がして」の記事が掲載された。その内容は県立高校で女子生徒が「参議院選挙のポスター」を校内に掲示し先生から「校内の政治的活動は禁止、剥がせ」と注意された。女子生徒は納得いかず地元紙に投書、内容が明らかになった。十八歳の選挙権が二〇一六年導入され、今年四月には成人年齢を条件付きで十八歳に引き下げられた。それに該当する女子生徒が関心を持ち行動した内容でした。学校側はそのポスター内容を確認しなかったと謝罪しポスターの掲示を認めた。女子生徒の活躍ぶりや変動する校内を知った感じは、仙台市の唯一の私立男子高校も今年共学化し女子高は私立の2校のみとなった。少子化による高校受験者数の減少で令和5年に全国募集する県立高校も出てきました。高校の大半を占める普通科を見直す政策も導入され、それに基づいて高校生の教育体制に動きがあります。教育が社会の基本であるだけに高校や大学の教育の在り方を一層注目し、若人が元気に生活できることを念願しています。

### 会員の声



「沖繩と私」  
野原 忠博 (教育社会 59年卒)

本年、沖繩は復帰50年を迎えました。返還を迎えるに当り、医療の分野でも琉球大学に医学部新設を前提に保健学部が開設されました。私も保健社会学講座を担当することになりました。ドルとパスポートの生活をしましたが、街の第一印象は立派な建物の多くが病院ということでした。いずれにしても激動の時代でした。

フィルドワークとして沖繩本島周辺の渡名喜島を足場に多くの島々を歩きました。「トナキ島」は戸無き島で、戸も必要としない穏やかで平和な人口七〇二人の島でした。沖繩の原風景が色濃く残る調査地でしたが、交通は非常に不便な島でした。

この時代、沖繩の離島や僻地では住民の健康管理は公衆衛生看護婦と診療所に勤務する医介輔によって支えられていました。医介輔は医師ではなく、米軍政府によって、医療関係に従事していた人びとが医介輔(メディカル・サービスマン)として認定され、復帰後も現地診療が認められた職種でした。数年を要しましたが、ほぼ全員とお会いすることが出来ました。刑務所内で勤務されていた医介輔さんとの面接は、体格の良い看



守に付き添われて三か所も鍵のある部屋を通り抜けて、介補制度の問題点などを話し合いました。得がたい経験でした。この制度は一代限りでしたので、今は存続していません。

ところで、沖縄では夕食を終えてからお酒を飲みに出かけるのが普通でした。勿論、職場での人間関係や出来事をサカナにすることはありません。八年間の単身赴任を終えて四十五歳で東京に帰ってから、食べてから飲むという身体に良い習慣は、瞬く間に崩れてしまいました。

定年が過ぎて、いつの頃か思い出せませんが、学生時代から御指導をしていただいた江馬成也先生の教えを口ずさみながらお酒を頂戴することが多くなりました。それはサルー(健康で)アモール(愛情豊かに)リネール(貧乏をしないうように)です。スペイン地方の乾杯の発声のようです。

手帳に昨晩何を食べたかを思い出せず、時に一週間も記載せず、驚いて百から七を引いていき、残り二と正解できず、反省と不安を感じている八十五歳にとっては心にしみる言葉です。子どもに迷惑をかけないようにと思っています。

「英語が開いてくれた世界の扉」  
沢登 袈裟平 学校教育 65年卒

私は、一九六一年、山梨県立日川高校を卒業して、中学の仙台へ

の修学旅行で観た東北大学に憧れて入学しました。ケネディ大統領の就任演説に感動し、ダラスでの暗殺に衝撃を受けた時代に在学して、教師を天職と考え勤勉だった阿部琢也君、クラシック音楽の素晴らしさを語ってくれた、麻布高校の先生になった田村寿朗君、そして日川高校の才媛同級生の中澤(旧姓渡辺)薫さんの三人の親友に恵まれ、楽しい英語専攻の学生生活を送りました。

私は、卒業後は英語を生かした仕事に就きたくて、IES(GHQ)の米国人が設立した対日投資会社等に対して税務会計等のサービスを提供する会社)に入社して、公認会計士になりました。因らざるも、米国の多国籍企業内のディヴィジョンで、西太平洋地域の財務部長であった米国人の後任に、ヘッドハンティングされ、米国の企業で働く貴重な体験ができました。

当時の日本はアジアで初めてのオリンピックで、活気に満ちていました。所得倍増政策に始まり、ミラクルといわれた高度経済成長を遂げ、エコノミックアニマルとも揶揄されながらも、メイドインジャパンの製品は、その高品質で世界市場を席巻していました。おかげで欧米人ばかりの企業で働く日本人の私は、国際利益計画会議等の場でも、日本人というだけで欧米の同僚は一目置いてくれました。そこで、欧米人が想像する勤

勉で、礼儀正しい、ネクタイと背広姿の典型的な日本人ビジネスマンを演じ切りました。流暢とはいえないが、十年間学んだ正確な英語で何とか切り抜けました。幸い資本主義社会の財務・会計・経営の専門用語は全て英語発祥ですから、仕事の上で困ることはありませんでした。以後、六十歳の定年に至るまで外資系企業一筋に勤めました。

教壇に立つ教官ではありませんが、公認会計士・税理士として今でも「先生」と呼ばれ、同年のバインデン大統領を見習って、コロナにも負けず、現役を貫いています。最後に、私にとって英語は今でも外国語です。居間・書斎・枕元の三か所に備え置いた電子辞書を使って、今でも難解なニューヨークタイムスとジャパントイムスの精読を日課とし、英語表現の妙味を味わうという小さな喜びを得る毎日を送っています。

「萩友会に参加して」  
菅田 美紀子 教育心理 67年卒

8月4日午後の3時間は充実の時間だった。「護る」「拓く」「繋ぐ」のキーワードで展開されたレクチャー。今村文彦先生による「世界の安全を守る東北大学の災害科学プロジェクト」は以前からの取り組みの進展を知る機会となった。高田昌樹先生による「次世代放射光がつくる社会」これは難解だっ

たが細胞の中の異分子の配列まで透視できる研究。そして植木俊哉先生による「東北大学による国際秩序への貢献」。これが今回私の記憶を五〇年前に引き戻しアドレナリンを沸騰させた時間となった。国際司法裁判官だった小田滋先生の名前を聞いたとき、先生の声はつきりと蘇った。「コーヒーには砂糖を入れないで！」大学の法学部図書館に勤務していた当時、幾代通先生が図書館長、樋口陽一先生や大勢の法律専門の先生方が日常的に出入りされていた。その方も。これはまさに国際秩序への貢献の証。

その後私は長いこと高校教師として苦闘の職場にいたが、授業はもろろん部活動や進路指導等での生徒とのふれあいの場ではこれまでの先生方の幅広い発想を思い出していた。多方面から物事を見ること。背景にこんなに豊かな脈が流れていたのだ。勿論教育学部では宮川先生や塚田先生、松本金寿先生等に毎日薫陶を受けたし、何より精神医学の授業で大病院で受けた人間の脳の働きの実態を学ぶ授業は圧巻だった。これは教職に就く誰もが必要な授業だといまだに考えている。有斐閣発行の小冊子「書斎の窓」に小田先生がハーグで暮らしておられたエピソードを交えて国際司法問題の難しさを書いておられた。この度

「令和四年、夏雑感」  
星 重昭 学校教育 69年卒

前回寄稿は五年前の今頃、今、思いつ見える時と世界は大激動、因二つ、令和元年の年末頃の新型コロナウイルス出現、今年二月のロシアのウクライナ侵攻だ。前者、人類初禍、我が国では今その波状攻撃が急速の第七波となりこれまでの最大、あらためて警戒と対応が求められる夏、後者、

の植木先生のレクチャーは当時の片平丁の法学部研究室での私達司書を交えた日々を鮮やかに蘇えらせてくれることになった。萩友会は五年前東京で開催された折小田和正さんの「緑の丘」が紹介され以後私の愛聴曲となっている。そのわけは担任した生徒が卒業式の日、クラス全員で「言葉にできない」を歌ってくれた深い想い出となっていたからである。

最後に、今年知り合いになった大学生が東北大学教育学部の修士に進学し教育情報アセスメントコースで教育評価測定論を学んでいる。整った環境で研究ができること。昔とは比べるべくもないが研究を続ける様子を見守ることができのを大変嬉しく思っている。まさに教育学部の後輩だ。ここまで大学とのつながりがあるのは偶然ではなく萩友会が繋いでくれる様々な機会を生かしているからだと思う。同窓会は大切だ。

「萩友会に参加して」  
菅田 美紀子 教育心理 67年卒

8月4日午後の3時間は充実の時間だった。「護る」「拓く」「繋ぐ」のキーワードで展開されたレクチャー。今村文彦先生による「世界の安全を守る東北大学の災害科学プロジェクト」は以前からの取り組みの進展を知る機会となった。高田昌樹先生による「次世代放射光がつくる社会」これは難解だっ

人道上許されぬ惨劇、目に見えぬ  
ウィルスとは違い、人が引き起こ  
した悲劇、癒される日が見えぬ辛  
すぎる夏。

短期梅雨の早夏到来、長期猛暑  
の六月梅雨明け、七月の梅雨戻り  
模様も地球規模の異常夏、その合  
間の真夏日午後、小戦の「バッハ  
無伴奏チェロ組曲独奏会」が横浜  
市戸塚区民文化センターで持たれ  
た。

東日本大震災復興祈念音楽会  
八十回「喜寿日にバッハの五番六  
番」は、二年半程前に計画された  
もの、大曲難曲の二曲を、感謝と  
同時に、挑戦の意も持ち演奏させ  
て頂いた。この間、肝心の復興祈  
念音楽会の開催は、コロナ禍に  
より非常に難しくなり、下火時に、  
内輪の関係者の発表会的「名曲ピ  
アノ伴奏会」が年に唯一回ずつ実  
施されたのみ、決心と同時にコロ  
ナ禍も始まったが、心のモチベー  
ションの長期維持はスポーツ他と  
同様、難しかった。

今回、喜びの目出度き日を、健  
康で迎えられ、音で感謝出来た様  
なのは幸、バッハは時を超えた  
楽神、幸一刻々に優しく微笑み、  
十五年前に旅立された中島隆久師  
も何度か背中を押して下さった様  
「心のケア」が我身にも起こって  
いたのであろう、有難いことであ  
る。

よく使われるこの言葉「心のケ  
ア」、簡単に口にするものではな

かるう。辛い時に、内なる心に沸  
き起こる、ある人から受けた、言  
葉ではない有難い何かか、何につ  
け、今後の活動の基軸にしたい、  
この夏の嬉しい実感だ。

相変わらず、コロナは見えない  
ことが多い中、間もなく四回目ワ  
クチン接種、皆で警戒と対応継続  
で乗り切ろう！、何も叶わぬ黒海  
付近の心配事・・・、大震災や大  
災害同様、意識を持ち続けよう。

実施を疑わない、久し振りの  
十一月関東同窓会、健康で刺激し  
合えたら本望だ。



今年、晴れて後期高齢者の仲間  
入りをした。「高齢社会デビュー」  
である。

まだ何とか口の方は達者だが、  
問題は足腰である。いつかは樋口  
恵子さんが言うところの「ヨタヘ  
ロ期」を迎えることになるが、大  
事なのは「歩ける」こと。寝たき  
りは御免である。

七年前に左足首を骨折した。後  
遺症で足首の可動域がかなり狭い。  
杖を使っても、どうしても左  
足を外に開きがちになる。そこで、  
正しい歩きをするよう指導されて  
いる。だから日々の散歩は、息抜  
きというよりリハビリである。

散歩中いろいろな花に出会う。  
戸建てのお庭、集合住宅の花壇、  
小さな公園、以前からの花好きの

ような顔をして、目にした草花の  
写真を撮る。草木の名前も、スマ  
ホのアプリのおかげで、少しは覚  
えた。もつとも、見慣れぬ高齢者  
が、杖を片手に花の写真を撮り歩  
いているから、地域の人には、時  
として不審者に見えるかもしれない。  
い。どうかご寛容のほど。

夏に入って、ちらほら萩の花を  
見かけるようになった。萩といえ  
ば、東北大の学生歌「青葉もゆ  
るこのみちのく」とある。この学生  
歌は、昭和二十八年(一九五三年)に  
作られ歌われてきているが、平成  
一九年(二〇〇七年)の創立百周  
年を機に、公式の学生歌となった。

学生歌は今でもすぐ歌えるが、  
実は萩がどのような香りか、確か  
めたことがない。しかし、ほとん  
ど香りがしないのに「シクラメン  
のかおり」という歌謡の名曲もあ  
る。細かいことにこだわるのは野  
暮というものである。大事なのは、  
志・想いである。

学生歌と併せて、新たに「学  
章・ロゴマーク」が制定された。  
萩がモチーフになっている。萩に  
はいくつか種類があるが、学章の  
萩が何か、大学の公式HPには記  
述がない。そこで知り合いの大学  
スタッフに聞くと、すぐに返事が  
あった。東北大の植物園の園長を  
されていた鈴木三男先生が、大学  
のメールマガジン(二〇〇五年創  
刊号)に、「モチーフはミヤギノ

ハギ」とお書きだそうである。  
ミヤギノハギは、高さが一〜二  
mで、地面に枝垂れるように赤紫  
色の花を見せる。清楚でいて華や  
かな花だ。開花は、これから夏が  
本番である。

骨折は不覚だったが、散歩を  
きつかけに、草花を知る楽しみが  
できたから、我ながら人生は面白  
い。



私の父は戦前教師をしていたが  
戦後復員して実業界に身を転じ  
た。ただ教育や研究への思いは断  
ちがたく生涯書齋で読書や思索に  
ふけていた。だから私が教育学  
部を選択したことを父はとても喜  
んでくれた。「教育学は諸学の王」  
とよく話していた。

初めて親元を離れて仙台ですご  
した学生時代は楽しく刺激的であ  
った。授業やサークル活動(詩  
吟部)を通し、また下宿先などで  
の自由放埒な生活を通して知り  
合った友人たちとの交友は、私の  
大切な宝物となっている。

何よりもありがたかったのは、  
大学で良き先生方にご指導いただ  
いたことである。  
一九七一年私は片平校舎で学ぶ  
学部学生に進学し、教育学科の「教  
育行政学・学校管理・教育内容」  
を専攻した。当時はまだ大学紛争  
の余波があり、学部進学試験ボー

イ

コット運動により学部進学者は少  
数派という状況であった。

専攻の教授は岩下新太郎先生で、  
助教教授は前原寿、松井一麿、高木  
英明の各先生であった。各先生の  
授業は我々が少人数ということも  
あってか、とても懇切丁寧であり、  
理論的かつ開明的であった。

私は特に前原寿先生の説かれる  
ペスタロッチーの教育観に魅かれ  
た。「教育は愛」「学校を家庭の居  
間の雰囲気で満たせ」「実質陶冶  
の背後にある形式陶冶を考える」  
やさしいおだやかな語り口でペス  
タロッチーの理論と実践をお話さ  
れる前原先生のお言葉は今でも私  
の耳もとに残っている。

私は一度お許しを得て先生のご  
自宅までお邪魔をしてお話しを  
伺ったこともあった。私は卒論の  
テーマをペスタロッチーの信奉者  
デイースターヴェークとし、前原  
先生のご指導をいただいた。

前原先生は「ペスタロッチー(人  
間と事業)」(岩波書店)を刊行さ  
れるなどひたむきに研究を続け  
ておられたが早くにお亡くなりな  
られた。まことに残念なことであ  
った。

当時私たちの専攻には「合研」  
と呼ぶ研究室があり、学部学生は  
登校した日はそこに立寄るのが習  
いとなっていた。助手やよく顔を  
出す大学院生は神山栄治、佐藤全、  
對馬達雄、若井彌一の各先生方で、  
いずれの方も教育学の泰斗となら

ず



れた。合研で交わされる知的刺激に満ちたお話を伺うのが私の楽しみであった。

私は文部省に奉職し教育界に身を置いたので、卒業後も先生方にお目にかかる機会も多く、ご指導いただいた先生方に心から感謝している。

初めて親元を離れた仙台での学生生活は遠い日の出来ごととなったが、忘れられない青春の学びの日々だったと思い返してみた。(表題は東北大学詩吟部詩冒頭の一説です。)



十数年前、公務員生活(最後は国立国会図書館調査及び立法考査局専門調査員)を終えた後、モットーとしたのは、「教育」と「教養」という言葉でした。その心は「今日行くところがある」と「今日用事がある」という意味です。

公務員時代は、朝から夜まで永田町の国会議事堂前にある国会図書館の建物をほとんど出ることなく、仕事に専念していました。退職後は、自由人となり、そうした縛りがまったくなくなりました。そんなとき、ある先輩が上記の言葉をご自身の退職後のモットーとされておられることを知り、私もそれにあやかろうと思った次第です。

幸い、いくつかの大学の講師の

仕事、研究プロジェクト等への参加、共著の執筆等々、毎日「今日行くところ」と、「今日用事」があり、時間を持て余すことなく過ごしてきました。またいろいろな場が充実した、楽しい時間をもつことができました。その間、お声をかけてくださった方々には、心より感謝しています。七十歳を過ぎ、大学の授業のほうは、ひとつの大学を残し、いずれも定年あるいは任期切れとなり一段落しました。

目下、お手伝いしているのは千葉県日独協会の仕事です(副会長)。第一次世界大戦中、中国で捕虜となったドイツ人兵士を収容した俘虜収容所が習志野にありました。習志野霊園には、当時蔓延したスペイン風邪がもとで収容中に命を失ったドイツ人兵士を弔う慰霊碑があります。千葉県日独協会は、毎年十一月のドイツ「国民哀悼の日」にドイツ大使館と一緒に彼らの慰霊祭を開催することを目的の一つとして一九九六年に設立されました。協会では、慰霊祭だけでなく、ドイツ語講習会、ドイツ旅行や懇親バス旅行、「ビール祭り」、クリスマス会、新年会などのほか、千葉県の文化交流行事にも積極的に参加しています。現在、コロナ禍でそうした活動が大幅に制約され残念です。

俘虜となったドイツ兵の残した日記や当時の記録などを読みます

と、捕虜に対しても給与が支払われており、収容所内でビールも購入できたそうです。また市民との交流もあり、その道のマイスターである俘虜から製法の伝授を受け、日本のソーセージ作りの草分けになった人もいます。そんな昔の資料の発掘、紹介なども会員同士の研究会で行っています。

詳しくは、当協会のホームページをご覧ください(https://jdc-chiba.com)。なお会員を常時募集しています。ご関心をおもちの方が身近におられまして、ぜひお声がけをいただければ幸いです。



私は半世紀前の一九七二年に大学へ入学。節目の年に「きょうかん」への投稿のお誘いを戴き、お礼を申し上げます。

昭和47年の入試会場は、片平の校舎で床のワックスの強烈な油の匂いを思い出します。理科の試験で生物選択者は、問題の一つに解答欄作成があったと聞きました。

入学後は、学費値上げ闘争による学生の大量留年などで、入学式もなく、教養部のバリエード封鎖で度々授業が休講となり、私は、入学直後に入部した茶道の同好会で毎日お茶を点てていました。下宿が八軒小路という所にあつたので、市電で長町線の舟丁から

西公園前まで乗り、中ノ瀬橋を渡り川内まで通っていました。当時市電は三十円と記憶しています。仙台商業高校と道路を挟んだ広々とした敷地には、米軍将校の元住居と言われた白ペンキが塗られ緑の窓枠の建物が何棟も残っていました。茶道の同好会の活動場所もその建物の一つでした。

学部は教育学科社会教育専攻で同時に国語の教員免許を取得するため、文学部の授業にも出席しました。外様扱いで肩身の狭い思いをしたのを覚えています。

当時の社会教育の研究室には、教授の佐々木徹郎先生と塚本哲人先生、助教授に田原音和先生と不破和彦先生がいらっしゃったと思います。田原先生は途中からフランスへ行かれました。不破先生は私の卒業論文の指導教官で、遅々として進まない卒論に多くの御助言を下さり、無事仕上げる事ができました。卒論を書き上げてから、友人と二人で先生に食事をご馳走になったことが懐かしく思い出されます。

大学四年の年には、教養部にサークル棟問題で、機動隊が導入され活動家の学生たちとの衝突が図書館から見えました。

卒業式は、今は萩ホールと言われる記念大講堂で行われました。卒業証書授与の最中に、ヘルメット姿の学生たちが侵入し、加藤陸奥雄学長に代わり岩下新太郎教育

学部長が授与されました。後日学長告辞と卒業生総代の答辞が送られてきました。

平成25年、東北大を受験する生徒激励のため、卒業後初めて大学を来訪。雪の中、教養部の講義棟が昔の姿のまま建っていました。記憶の彼方にあつた四年間を振り返ることができ感謝です。



東北大学に入学したのが昭和63(一九八八)年で、奇しくも昭和最後の入学生でした。学部卒で就職した同期生は、いわゆるバブル世代の最後の就職者であり、一学

年下からは氷河期世代です。否が応でも時代の流れを痛感させられました。が、東北大学にはちょうど十年間学生として過ごすことが出来ました(在学十年のうち、博士後期課程では情報科学研究科に移りましたが、こちらはこちらで最後の三年間、片平キャンパスで過ごすことができました)。充実した学生時代を送ることが出来たのは、今考えてみれば奇跡のように思われ、感謝申し上げます。第です。

最初の就職先の岩手県立大学に、一九九八年の開学から五年間勤務し、縁あって二〇〇三年度から東京学芸大学に移り現在に至っています。異動当時の所属は、「特殊教育研究施設」でしたが、翌

二〇〇四年度からの国立大学法人化に伴い、他のセンターと統合化され改組となりました。その後も改組が続き、現在は「特殊支援教育・教育臨床サポートセンター」という名称になっています。

「特殊教育研究施設」は一九六七年発足で、障害児教育に関する歴史ある大学付属の研究施設でした。時代のタイミングなのか、この施設についても奇しくも私が最後に採用された(かつ、おそらく最年少の)専任所員となりました。他の大学と同様、教員ポスト削減の影響により、現在の職場のセンターも教員が少なくなっており、やや寂しい状況です。大学改革は今後も多くの展開が予想されますが、昭和入学生最後の生き残り(?)として無事業務を全うできればと考えています。東京には今まで全く縁がありませんでしたが、三十歳を過ぎてから移ろうと考えたきっかけの一つが、一九九九年にJICAの派遣でサウジアラビア王国教育省に勤務し、現地の特別支援学校を視察したことでした。教育現場により近いところで研究したいと考えた次第ですが、このコロナ禍の状況で、その重要性をより実感する今日この頃です。また、異なる文化に日々触れて見聞を広めることが人生の中では有意義だと改めて気付かされます。コロナ禍ゆえに様々な制約が生じ、教え子の中にも留学希

望ですが足止めに至っている者もいます。若い人たちにも大変な時代ですが、精進を重ね、今後のチャンスを活かして人生を切り拓いてもらうよう期待したいところです。

学生歌「青葉もゆるこのみちのく」

作詞 野田 秀・作曲阿座上竹四  
 一 青葉もゆる このみちのく  
 今ここに はらからわれら  
 力もて歌う 平和の讃歌  
 われらこそ われらこそ 国のいしずえ  
 理想ある 生命は常にうるわし  
 さらは 生きん  
 友よ 生きん

二 萩のかおる このみやぎの

今ここに 集いしわれら  
 愛もて求める 真理のしるべ  
 われらこそ われらこそ 学部のほこり  
 歴史ある 伝統は常に若し  
 さらは 伸びん  
 友よ 伸びん

三 朝馬なく ひろせ川

今ここに 安らうわれら  
 心もて語る 自由の行く手  
 われらこそ われらこそ 世界のかなめ  
 未来ある 若者は常に強し  
 さらは 行かん  
 友よ 行かん

学生部が作詞作曲を募集、昭和28年10月31日、七百名の教職員・学生が集合、学生歌選定委員会推薦の三点を全員投票し選定した。

第16期 役員 (〇印新任、※異動)

以下の方が第16期のお世話役です。

- 会長 星 永揚 (66社会)  
 副会長 ※横館 厚太 (67学校)  
 阿部 孝 (69行政)  
 事務局長 ※長沼 真吾 (88行政)  
 幹事 田沢 良介 (62心障)  
 ※石森ミネ子 (68学校)  
 小熊 順子 (69心理)  
 〇郷家 和子 (69心障)  
 徳田 英明 (69心理)  
 星 重昭 (69学校)  
 北館 博人 (72社会)  
 顧問 会計監査 ※阪内 宏一 (69行政)  
 ※笹川智恵子 (69哲学)  
 江川 亮 (55心理)  
 大曾根良衛 (55哲学)  
 小林幸一郎 (55社会)  
 越河 六郎 (57心理)  
 家根 敏明 (57社会)  
 荒木 廣 (58行政)  
 木戸 裕 (74哲学)  
 小戸 昭文 (76哲学)  
 〇岩田 真 (79社会)  
 細川 富夫 (79心障)  
 〇飯野 健児 (83社会)  
 野村 正宣 (89心理)  
 小林 巖 (92心障)

●第16期 一般会計収支決算書 (令和2年11月~令和4年10月)  
 (決算額は令和4年9月15日現在予測、最終決算は11月6日の総会時に提出いたします)

(1)収入の部 (円)

科目	A 予算額	B 決算額	差異 (B-A)	備考
1. 維持会費	540,000	498,000	▲ 42,000	会費納入者166名
2. 寄付金	0	4,000	4,000	
3. 雑入	5,000	7	▲ 4,993	利子
4. 繰越金	407,086	407,086	0	
合計	952,086	909,093	▲ 42,993	

(2)支出の部 (円)

科目	A 予算額	B 決算額	差異 (B-A)	備考
1. 運営費	150,000	36,719	▲ 113,281	第16期役員会等
2. 活動費	480,000	427,250	▲ 52,750	総会・役員会準備、「きょうかん」作製等
3. 需用費	200,000	209,415	9,415	「きょうかん」発送費、通信費等
4. 予備費	122,086	0	▲ 122,086	
合計	952,086	673,384	▲ 278,702	

(3)第17期への繰越  
 (1)-(2)= 909,093円 - 673,384円 = 235,709円

●第16回 総会・懇親会収支報告

令和2年秋に開催予定だった第16回総会・懇親会は、新型コロナウイルス禍を考慮し、開催を中止しました。従って、収支の実績はありません。

●第17期 収支予算(案) (令和4年11月~令和6年10月)

(1)収入の部 (円)

科目	A 予算額	B 前期予算	対前期費増減 (A-B)	摘要
1. 維持会費	510,000	540,000	▲ 30,000	3,000円×170名
2. 寄付金	0	0	0	
3. 雑入	5,000	5,000	0	利子等
4. 繰越金	235,709	407,086	▲ 171,377	
合計	750,709	952,086	▲ 201,377	

(2)支出の部 (円)

科目	A 予算額	B 前期予算	対前期費増減 (A-B)	摘要
1. 運営費	100,000	150,000	▲ 50,000	役員会費
2. 活動費	430,000	480,000	▲ 50,000	総会準備・会報作成等
3. 需用費	200,000	200,000	0	会報郵送料、通信費等
4. 予備費	20,709	122,086	▲ 101,377	
合計	750,709	952,086	▲ 201,377	

【第17期の活動方針】

会員相互の親睦と交流を本旨とし、本会の一層の充実・発展をめざし、会員の意見、提案を反映させる「会員参加の同窓会」を運営の基本とする。この趣旨にもとづき、会員の理解と協力を得ながら、次の活動を堅実に継続推進する。

- 会員相互の交流を積極的に進め、活動の充実と会員拡充を図る
- 会報「きょうかん」の発行(令和5年「臨時増刊号」、令和6年「第17号」の2回)
- 第18回(令和6年開催予定)総会・懇親会の開催
- 東北大学教育学部同窓会本部・東北支部、および東北大学校友会(全学同窓会)との連携強化



# きょうかん 第16期 (令和2年11月~令和4年10月) 維持会費ご協力のみなさま

納入ありがとうございました。(166名、敬称略、専攻別・卒業年度順)

- 【教育哲学 14名】**
  - 大曾根良衛 若林 滋
  - 橋本紀子 笹川智恵子
  - 古橋康子 鈴木重男
  - 玉田文男 木村俊二
  - 戸張嘉勝 木戸 裕
  - 小林昭文 福原 武
  - 渡邊範夫 西山 拓
  - 小林幸一郎 家根敏明
  - 大寄 晉 野原忠博
  - 長谷川嵩 菊谷邦雄
  - 石塚米子 堀籠英夫
  - 吾田壹明 杉浦洋一
  - 西村孝雄 鈴木俊之
  - 中林勝男 阿部 實
  - 佐藤千代乃 手塚 紘
  - 星 永揚 佐久間孝正
  - 塩入 肇 千條 武
  - 巽駒太郎 小玉幸彦
  - 斎藤貞夫 菅野 正
  - 野島節子 山口久子
  - 北館博人 市塚 守
  - 佐々木昭美 佐々木博
  - 津吹 茂 斉藤嘉明
  - 井越伯子 上羅 廣
  - 菅谷 清 半田扶美子
  - 金子輝樹 岩田 真
  - 小泉信三 佐々木浩
  - 田崎正紀 松本英子
  - 飯野健児 歌代真人
  - 小野允宏 佐藤靖志
  - 鈴木英一
- 【教育社会 47名】**
  - 郷家和本子 員見芳房
  - 落合俊郎 鷲尾純一
  - 山森伸子 細淵富夫
  - 諏訪幸子 藤野 博
  - 北島善夫 小林 巖
  - 齊藤政通
  - 安田養次郎 梶原 葉
  - 高橋渥子 柴田洋子
  - 渡辺登美子 猪又和子
  - 田中重富 北條忠男
  - 金野久子 小川紀子
  - 渡辺成男 後藤 光
  - 沢登袈裟平 伊藤育子
  - 長谷川巖 横館厚太
  - 石森ミネ子 栗原孝義
  - 齊藤次郎 富永和彦
  - 細谷靖男 鬼 宗久
  - 星 重昭
- 【学校教育 23名】**
  - 稲葉雅彦
  - 小林順子
  - 阿部 孝
  - 阪内宏一
  - 加藤正彦
  - 鈴木健一
  - 銭谷眞美
  - 大友俊敬
  - 高木宏幸
  - 小金智子
  - 高島俊文
  - 高嶋眞美
  - 寺内 誠
  - 橋本有子
  - 片桐みゆき
  - 小川慎介
  - 石井正春
  - 吉岡 忍
  - 黒住ひろ子
  - 菅田美紀子
  - 黒須俊夫
  - 伏見陽児
  - 出口利定
  - 吉村葉子
  - 伊藤良子
  - 大室充子
  - 小滝 威
  - 吉田恵子
  - 野村正宣
  - 佐藤公彦
- 【教育心理 28名】**
  - 奥泉英夫
  - 位田尚隆
  - 溝口とみ子
  - 木村 祐
  - 小熊順子
  - 佐々木正秀
  - 堀口隆夫
  - 中村美恵子
  - 桜井栄樹
  - 寺島ひろ子
  - 野露るみ子
  - 田口有里
  - 馬場章信
  - 吉川智子
  - 鈴木貞夫
  - 田沢良介
  - 石井正春
  - 吉岡 忍
  - 黒住ひろ子
  - 菅田美紀子
  - 黒須俊夫
  - 伏見陽児
  - 出口利定
  - 吉村葉子
  - 伊藤良子
  - 大室充子
  - 小滝 威
  - 吉田恵子
  - 野村正宣
  - 佐藤公彦
- 【教育行政 39名】**
  - 清水俊雄
  - 新井雄啓
  - 須貝幸雄
  - 秋田義明
  - 鈴木英一
  - 小野允宏
  - 飯野健児
  - 田崎正紀
  - 小泉信三
  - 金子輝樹
  - 菅谷 清
  - 井越伯子
  - 津吹 茂
  - 佐々木昭美
  - 北館博人
  - 野島節子
  - 斎藤貞夫
  - 巽駒太郎
  - 塩入 肇
  - 星 永揚
  - 佐藤千代乃
  - 中林勝男
  - 西村孝雄
  - 吾田壹明
  - 石塚米子
  - 長谷川嵩
  - 大寄 晉
  - 小林昭文
  - 渡邊範夫
  - 渡辺登美子
  - 田中重富
  - 金野久子
  - 渡辺成男
  - 沢登袈裟平
  - 長谷川巖
  - 石森ミネ子
  - 齊藤次郎
  - 細谷靖男
  - 星 重昭
  - 郷家和本子
  - 落合俊郎
  - 山森伸子
  - 諏訪幸子
  - 北島善夫
  - 齊藤政通
  - 安田養次郎
  - 高橋渥子
  - 渡辺登美子
  - 田中重富
  - 金野久子
  - 渡辺成男
  - 沢登袈裟平
  - 長谷川巖
  - 石森ミネ子
  - 齊藤次郎
  - 細谷靖男
  - 星 重昭
  - 稲葉雅彦
  - 小林順子
  - 阿部 孝
  - 阪内宏一
  - 加藤正彦
  - 鈴木健一
  - 銭谷眞美
  - 大友俊敬
  - 高木宏幸
  - 小金智子
  - 高島俊文
  - 高嶋眞美
  - 寺内 誠
  - 橋本有子
  - 片桐みゆき
  - 小川慎介
  - 石井正春
  - 吉岡 忍
  - 黒住ひろ子
  - 菅田美紀子
  - 黒須俊夫
  - 伏見陽児
  - 出口利定
  - 吉村葉子
  - 伊藤良子
  - 大室充子
  - 小滝 威
  - 吉田恵子
  - 野村正宣
  - 佐藤公彦
- 【心身障害 15名】**
  - 高橋敏行
  - 大沼直紀
  - 鈴木貞夫
  - 田沢良介
  - 鈴木英一
  - 小野允宏
  - 飯野健児
  - 田崎正紀
  - 小泉信三
  - 金子輝樹
  - 菅谷 清
  - 井越伯子
  - 津吹 茂
  - 佐々木昭美
  - 北館博人
  - 野島節子
  - 斎藤貞夫
  - 巽駒太郎
  - 塩入 肇
  - 星 永揚
  - 佐藤千代乃
  - 中林勝男
  - 西村孝雄
  - 吾田壹明
  - 石塚米子
  - 長谷川嵩
  - 大寄 晉
  - 小林昭文
  - 渡邊範夫
  - 渡辺登美子
  - 田中重富
  - 金野久子
  - 渡辺成男
  - 沢登袈裟平
  - 長谷川巖
  - 石森ミネ子
  - 齊藤次郎
  - 細谷靖男
  - 星 重昭
  - 郷家和本子
  - 落合俊郎
  - 山森伸子
  - 諏訪幸子
  - 北島善夫
  - 齊藤政通
  - 安田養次郎
  - 高橋渥子
  - 渡辺登美子
  - 田中重富
  - 金野久子
  - 渡辺成男
  - 沢登袈裟平
  - 長谷川巖
  - 石森ミネ子
  - 齊藤次郎
  - 細谷靖男
  - 星 重昭
  - 稲葉雅彦
  - 小林順子
  - 阿部 孝
  - 阪内宏一
  - 加藤正彦
  - 鈴木健一
  - 銭谷眞美
  - 大友俊敬
  - 高木宏幸
  - 小金智子
  - 高島俊文
  - 高嶋眞美
  - 寺内 誠
  - 橋本有子
  - 片桐みゆき
  - 小川慎介
  - 石井正春
  - 吉岡 忍
  - 黒住ひろ子
  - 菅田美紀子
  - 黒須俊夫
  - 伏見陽児
  - 出口利定
  - 吉村葉子
  - 伊藤良子
  - 大室充子
  - 小滝 威
  - 吉田恵子
  - 野村正宣
  - 佐藤公彦

※「きょうかん」  
会員の拡大にご協力を！  
お知り合いに未  
加入の同窓生がい  
らしたら、ぜひ  
「きょうかん」へ  
のご加入をお勧め  
ください。  
お声がけをお願い  
いたします。

（会員の計報）  
（令和4年8月30日現在）  
以上合計166名  
今期次の方が逝去されました。  
心からお悔やみ申し上げご冥福を  
お祈りいたします。  
川野 恵子様（学校）二〇二二年  
菊谷 邦雄様（社会）二〇二〇年  
佐藤 全様（行政）二〇二二年  
高橋 勝也様（行政）二〇二二年  
藤枝 静正様（行政）二〇二二年

## 編集後記

八月下旬、仕事の関係でリメ  
ディアル教育学会全国大会に参加  
してまいりました。この学会も、  
一昨年は大会を中止し、昨年はオ  
ンライン形式での開催でしたので、  
三年ぶりの対面式での大会開催で  
した。大会実行委員の先生方に対  
面式でのリアル開催を選択された  
理由をお聞きしたところ、「研究  
の発表や内容に関する議論はオン  
ラインで十分にできるが、研究の  
深化に繋がる刺激や新たな展開に  
繋がる発想は、人と人との出会い  
の中でこそ生まれる」から、との  
ことでした。大会参加者は、コロ  
ナ禍前の半分程度とのことでした  
が、参加者の皆様が対面式開催に  
意義を感じられ、喜ばれているご  
様子

様が印象的でした。  
さて、来たる十一月六日（日）  
に麗澤大学東京研究センターを会  
場に第17回東北大学教育学部関東  
地区同窓会「総会」が久しぶりに  
開催されます。事務局として感染  
症対策をしっかりと行い、安心し  
てご来場いただけるように準備を  
してまいります。お誘いあわせの  
上、どうぞご参加下さい。収束が  
見通せないコロナ禍だけでなく、  
ロシアによるウクライナ侵攻や物  
価高による生活の不安定化など悩  
み多き世の中です。このような時  
だからこそ、人生の貴重な一時期  
を同じキャンパスで過ごしたもの  
が時を経て新たな交流を図ること  
は、それなりの意義があり、触れ  
合いにより大きな喜びを得られる  
のではないのでしょうか。（長沼）

## 第17期(令和4年11月~令和6年10月) 維持会費納入のお願い

東北大学教育学部関東地区同窓会は、平成元年7  
月に創設され今年で34年目を迎えました。  
この間、会員の皆様のご協力ご支援に支えられ着  
実に歩を進めることが出来ました。心から感謝申し  
上げます。本年11月から第17期に入りますが、更なる  
発展を期し役員一同決意を新たにしています。  
同窓会活動は、会員の皆様からご協力いただきて  
おります維持会費（2年間で3,000円）により支えら  
れております。第17期もご協力いただきますよう、  
よろしく願っています。  
本日、「郵便振込表」を同封させていただきますので、  
勝手申し上げ恐縮ですが、**本年12月末までに**、維持  
会費を納入いただきたくお願いいたします。

東北大学教育学部関東地区同窓会  
会長 星 永揚

●連絡先 事務局 長沼 真吾  
TEL・FAX 042-656-3484  
メール naga-naka-se@aa.cyberhome.ne.jp



「きょうかん」第16号の正誤訂正のお知らせ

該当ページ	誤 (×)	正 (○)
P2 の写真の脚注	「川内 <b>萩</b> ホール」	「川内 <b>萩</b> ホール」
P7、1 段目・4 行目	現在は「 <b>特殊</b> 支援教育・	現在は「 <b>特別</b> 支援教育・

上記の件、お詫び申し上げ、訂正させていただきます。